

ビルマの仏教について

藤 吉 慈 海

ビルマ人という呼称は、遠くインドの梵 Brahma に由来するといわれる。ビルマ人は元来モンゴリヤンに属するが、その伝説はすべてインドに発している。ビルマの編年史は彼等の祖先がインドの釈迦族の後裔で、北インドに住んでいたという。また民間説話も多くインドのもので、カースト制度に関する話や、その原型をインドに求められるものが多い。

さてインドからの移住者は大体二つの道を通してビルマに入ってきているようである。一つはアッサムを通して北部ビルマへ、他の一つは南インドから海を越えて南部ビルマへ上陸している。しかし、これらの移住者の血の中にもモンゴリヤンの血が混っていたであろうといわれている。というのはモンゴリヤンの血は今日より以上にインド平原の南部にまで拡がっていたと推定されるからである。そうすると同じ大陸続きのタトンやプロム、ペゲー、ラングーン等をはじめとしてアラカン地方には早くからインドからの移住者が多く住んでいたであろう。Talaing という名はマドラス海岸の Telingana に由来するとも言われるから、ビルマの南部には多くのインド人が移住し、これらのインド人たちは、西暦紀元前にペゲーのシュエモドーやラングーンのシュエダゴンやタトンのシュエザヤン等のもとなる寺院を造っていたと推測される。そして、そこには少数の僧侶もいたであろうが、アショカ王がオリッサに侵入し、仏教をインド東南部に伝えてからは (B.C.261), 仏教的要素を含んだバラモン教が次第にビルマにも入って来たとみられるであろう。もちろん仏教がビルマに根をおろすまでには相当の年月を必要としたであろう。第五世紀のはじめマガダ国の僧 Buddhagosha (仏音) がセイロンに仏教經典の註釈書を求めて後、セイロンからビルマへ来たとされているが、これには問題があるとしても、第五世紀にコンジバラムに有名な註釈家ダルマパーラが出て巨大な寺院が建立され、仏教が非常に盛んになると、ビルマにもその影響が明瞭に見受けられる。

かくの如く仏教はインド人の海外発展の一部として海を渡ってビルマに入った。そして仏教はダルマパーラ以後も多くのインドの諸宗教と共存し、時には論争することもあった。しかし、これらのインドの宗教や仏教の信仰は主として都市の住民に影響を与えただけで、多くの民衆は樹木や石に宿るナット nat と呼ぶ精霊崇拜のような原始宗教の域を脱しなかったようである。

さて、はじめ北インドからビルマに入った仏教徒は Ari と言ったが、彼等は仏教の比丘ではなく、奇蹟を行う一種の修行者であった。何か呪文を誦することによって如何なる罪業も除かれると説く、ミンジヤン州の Thayapu 寺の壁画にみられるような、藍で青く染めた法衣を着け、長い髪を垂れた奇怪な修行者の群であった。彼等の説くところは、今日のビルマ人が認めるような仏教とは異り、それはチベットやネパールから来た仏教の変形したもののようである。彼等は馬に乗り酒を飲み蛇を拝み、女神を妻に持つ仏陀を崇拜していた。彼等は上下の差別なく初夜権を行使したとすら言われている。パガン王朝（1044～1287）が確立されるまでは、仏教とは言っても、それはインドの諸宗教と混合したもので、本当に純粋な仏教はまだビルマには見られなかった。

ビルマの歴史に確固たる時代を劃するのは第11世紀のパガン王朝であるが、この王朝は寺院建立者の時代といわれる程、仏教に関係深い王朝である。この王朝をはじめた Anawrāta（1044～1077）はこれまで行われていた密教的な仏教を廃棄して、新しくテーラバーダ仏教を取り容れたので、ビルマの仏教史はパガン王朝によって一大転換をなしている。それで、それ以前の仏教遺物は極めて少くないが、ブロムで発見された梵語の碑銘によって、古く同地方に説一切有部の行われていたことがわかる。また北部ビルマから出土した梵語の碑銘等によって、密教的大乗仏教の流布していたことも推測される。Anawrāta 王はメイッティラー湖を修復したり、東方の山地を訪ね、ヤンホエの近くに Bawrithat 塔を建立して、附近のシャン族の臣礼を受けた。その他、運河を造り水系を整えて水利の便をはかったりした。

さて1056年に Thaton の一バラモンの子 Shin Araham が Pagan にやって来た。彼は上座部に属するタライン族の比丘で、かねて北部ビルマに仏教をひろめんと企図していたので、Anawrāta 王にあい、その帰依を受け、Ari の墮落した仏教を肅正した。記録によると Ari は1315年までサガインに残存していたことがわかる。

さて、この Shin Araham は Anawrāta 王に説いて写経を Thaton に求めしめたが、拒絶されたので、王は全軍を率いて Thaton を攻め滅ぼした（1057）。しかしこの時、滅ぼされたのは Thaton でなくタイ国の Prapatom であるとも言われる。

Thaton からの捕虜の流入は、北ビルマの文化に貢献した。① Shin Araham は Thaton の僧の助けによって、多くの経典を Pagan の経蔵に収めた。② 梵語に変わってパーリ語が経典語として用いられた。③ビルマ人はタライン文字を採用し、初めてビルマ語を文字に写した。かくて Pagan は次第に北部ビルマの文化的活動の中心地となり、セイロン等の諸外国と交渉を持つようになった。

さて仏教がインドでその勢力を失うと、信心深い仏教徒たちは迫害をのがれて遠くタイ国方面まで逃げて行った。その中の一部は当時宗教の中心地として有名になりつつあった Pagan へもやって来た。インドから来た八人の僧は Pagan の Kyanzitha（1084～1112）に優遇された。

そして彼等はオリッサのウダヤギリにあるアーナンダ石窟寺に似せてパガンにアーナンダ寺を造らせた。先年ウ・ヌ首相によって修理されたこの寺はパガンにある5000有余の寺塔のうち最も壮麗なものである。Kyanzitha 王は白馬に乗り僧俗の行列の先頭に立って、1090年にこの寺の落慶式を挙行了した。

装麗なる彫刻によって飾られたアーナンダ寺は、たくさんの言語や異った民族の集合と、北部ビルマはもちろん、イラワジ河のデルタ地帯に及ぶ広大な王権を象徴するものとなった。しかし、この美しい寺院建築に有頂天になった王は、どうしたわけかその設計者を殺してしまった。この寺院の建設の時に、一人の少年が人身御供（myosade）としてその礎に生埋めされた。新しい宗教としての仏教も、この旧来の慣習たる生贄の儀礼を拒みきれなかった。ともあれ王はこの寺の維持に力をつくし、六つの村をこの寺の寺領とした。王はこの外40の小塔を各地に建立し、対外的には南インドのチョーラ国王に仏教に帰依するよう勧告したり、ビルマ王として、はじめてインドの仏蹟ブダガヤの塔を復興した。この間にあって活躍したのが Shin Arahan で、彼は1115年81才でなくなるまで Pagan から各地に拡まった上座部仏教の統率者として偉大な貢献をなした。

Pagan 王朝によって上座部の仏教が確立されたとしても、伝統的な儀式や習慣が一時に死滅したわけではない。しかし、ともかく Pagan 王朝は240年間存続し、歴代の諸王が仏教を信奉したので、国民もまた仏法に帰依し、Pagan はもちろん、いたるところに沢山のパコダを建立した。イラワジ河畔に残るものだけでも9000に達するといわれるが、このような多数のパコダの建立は、国民に熱烈な信仰心を植えつけた。このような仏教による民心の安定が、この王朝を永続せしめた原因とも考えられるが、たくさんの国帑と国民の労力を浪費したことも事実で、仏塔成って大国亡ぶとの流言も行われた。

インドに仏教が衰微してからは、コンジーバラムもバラモン教徒に征服されて、昔の佛なく、セイロンが上座部仏教の中心となり、ビルマの比丘たちはセイロン島に渡って修学し、この島を仏教の根拠地と考えるようになった。タラインの僧ウッタラジーバは1180年にセイロンに渡り、仏教を学んで第一のセイロン巡礼者といわれ、同行したチャパタは十年間セイロンに留って第二のセイロン巡礼者と呼ばれた。それから仏教を求めてセイロンに行く比丘も多くなり、アヌラーダプラのマハービハーラはビルマの比丘にとっても憧憬の地となり、セイロン仏教の影響を強く受けるようになった。すなわちチャパタは帰国の際、同じくセイロンにおいて受戒した四人の外国僧を伴って帰った。そしてこの五人の比丘たちは Pagan の北ニヤウンウーにセイロンの仏塔に模してチャパタ仏塔を建立した。そして彼等は従来のビルマのサンガが律に契っていないとして、1192年別に一派を樹立した。かくて、Shin Arahan すなわちタトーン仏教の流れを汲む従来のビルマ僧団は古義と呼ばれ、新来のセイロン僧団の法統を継ぐ者を新義と呼ぶようになった。Narapatisithu 王（1173～1210）もセイロンに留学したこれらの僧侶の学識

に感じてこれを援助した。それでビルマの僧侶たちも新教団の風を好み、僧侶をセイロンに送ってマハービハーラで受戒せしめた。このような両国間の交渉はセイロンをしてビルマ仏教の上に大きな勢力を樹立せしめることとなった。タトーンの仏教はおそらくコンジーバラムから伝来した仏教であるが、それが Shin Arahan 等によって北部ビルマに弘通されてから 130 余年、1192 年新たに輸入されたセイロン仏教は遂に北ビルマの仏教界を支配するに至った。

Pagan 王朝最後の王 Narathihapate (1254—87) は蒙古軍のため敗れ、イラワジ河上の船中で自殺した。そして Pagan 王朝の広大な版図は支那とシャムとに誼みを通じていたシャン族野武士の分割するところとなった。すなわちシャン族治下のビルマは 1287 年から 1531 年まで続くが、その間 Ava (1287—1555) を中心として北ビルマは対立抗争をくりかえした。その間、仏教の僧侶たちは王侯等の粗暴を抑制し、戦争を防止する働きをして来た。またペゲーを中心とした王朝はシャン族の王が相次いだ、Shinsawbu (1453—72) 女王にいたって仁政をしいた。彼女は Dhammazedī (1472—92) に王位を譲って、晩年をシュエダゴン、パゴダに送った。

このような小民族抗争の時代には個々の事蹟はあっても、仏教的活動は一般に低調で、セイロンからやって来たマハービハーラに由来するシーハラ・サンガも更らに多くの教団に分裂した。その分裂の原因となるものは、重要な教理の相異に因るのではなく、微細な律の問題であった。すなわち比丘たちの日常生活を律する規則の解釈の相異や、受戒の形式等に関する厳粛派と自由派とが常に分裂の原因をつくった。すなわちシーハラ・サンガはタライン地方にもひろまり、そこでもまたたくさんの紛争を惹起した。このように多くの紛争をおこすことは、小分派そのものの崩壊をきたすのみならず、宗教々団そのものを墮落に導くことになる。これらの分裂を合せしめ、弱体化した教団を強化し、仏教に新しい生命を吹きこむことが、当時最も必要なことであった。この要求に応ずるかの如く、Dhammazedī がペゲーの王となった時 (1472)、セイロンのマハービハーラの教団がビルマの仏教を援助するために比丘たちを派遣した。この Dhammazedī 王の行った宗教肅正は結局シーハラ・サンガの勝利となり、その教団の基礎をより鞏固にすることになった。このようにビルマの王室は常に古来のものよりセイロンから新しくやって来た教団を支持した。それでセイロンの教団がビルマに優勢となったことは注目すべきことである。シーハラ・サンガの勝利は、実際は正統派に立つマハービハーラの伝統の勝利を意味する。かくて律の法則を正統的な解釈にしたがって守ることが、ビルマにおける仏教の理想であり特色となった。

1472 年 Dhammazedī 王の宗教肅正によって、仏教界も暫くの間はうまく行った。しかしながら大多数のビルマの王たちは、宗教に対して殆ど関心を持たぬ野蛮な専制君主ばかりであった。その中には僧侶を殺したり、その宝物を強奪することを好む者もいた。もちろんかなりの王たちは、特別に宗教的であるとか高い精神的理想をもっているわけではないが、宗教の保護者としての役割を演じた。これらの貢献の背後には、社会的または政治的な意見に影響を与え

うる唯一の組織団体としての仏教教団の支持を得たいという意図も含まれていた。

タラインの Toungoo 王朝 (1531—1752) は約200年間継続し、ビルマ族の英雄 Bayinnaung王 (1551—81) の如き、その版図北ビルマ、シャン諸州およびシャムに及び、熱心に仏教を保護し、シャン族の風習たる殉死を禁じ、禁酒・不殺生をすすめ、回教植民者の間に行われていた Bakrid (牛祭) の時、牛を羊のかわりに犠牲にすることを禁じた。しかし、一般に戦乱相次いだ上に、新航路の発見以来、ポルトガル、オランダ、イギリス人等が相次いで来往し、外交問題も惹起した。

次におこったビルマ族の Alaungpaya 王朝 (1752—1885) は Shwebo に都し、タライン族を滅したが、Hsinbyushin (1763—76) は Shwebo が内陸都市であるためイラワジ河に臨む Ava に都を遷した。Harvey 氏が指摘しているように、1498年ヴァスコ・ダ・ガマの新航路発見以来、ビルマの重心はデルタ地方に移動していた。そして、Bayinnaung (1551—81) から Anaukpetlun (1605—28) にいたる歴代諸王がペゲーを都としていたことは、彼等がこの事実を認識していたかの観がある。しかるに彼等以後の諸王の中、一人としてこの事実を認識した者はいない。このことはビルマの運命を封ずることであった。ビルマの王室がもしラングーンにあったなら、少しは海外から清新の気が流れこんだであろう。もし歴代の諸王がシャムやアッサムの遠征に力を消費せず、デルタ地方に善政を施したなら叛乱もおこらずにすんだであろう。彼等がこのデルタ地方に遷都することを欲しなかったために、その王室の雰囲気は、周囲の諸部落のそれと変りなく、10世紀のおくれをとってしまった。仏塔の建立、隸下の諸侯の娘たちの狩り集め、奴隷掠奪のための入寇、白象を獲んがための出師——これらの想念が一世を風靡したが、かかる想念を脱却し得ない王国は滅亡のほかなかった。

Alaungpaya 王の長子 Bodawpaya (1782—1819) は新都 Amarapura へ遷り、アラカンを征めて大牟尼の像やアユティアの諸青銅像を戦利品として持ち帰った。そのうち六体は現にマンダレーのアラカン寺に残っている。アラカン寺の附近には Bodawpaya の蒐集した六百の刻文がある。彼は僧侶があまり土地を持ちすぎていることに気づいて、寄進のことを誌した刻文の調査を命じ、それらの刻文の謄本を作ってここに置かしめた。これは歴史家にとって貴重な資料である。彼はシャムを征めて失敗したが、多くの湖沼の堤防を修築し、仏塔を多く建立した。そのうちサガイン地方のミングンの仏塔は巨大なもので、1790—97年の間、彼は自らこの工事の監督にあたったが、五百呎と予定された塔の工事の途中、「仏塔成って大国滅ぶべし」との予言者の声がおこった。それで彼は工事を放棄したが、ミングンの大梵鐘は世界第二の大鐘で、塔は現存する煉瓦の堆積としては世界最大のものといわれ、イラワジ河畔にマンダレーと相対して、今日もなお遊子の杖をひくところである。

ミングンに滞在中、彼は自分が神であるという啓示を受け、「自分が当来仏聖弥勒である」と宣言した。しかし僧侶たちはこれに反対した。王は隠棲の身にしてなお都の栄華を思い、後

宮の生活に思いをはせた。やがて天国の幻も色褪せて、彼は再び地上の人となった。彼は一時僧侶の言を疑い、僧侶は臣下として分不相応の尊敬を受けていると考え、僧侶に対し、ポンジー（大光）という称号を廃すべしと布告した。何となれば、この称号に値する者は独り自分のみと考えたからである。

1802年、重要な宗教使節の一行がセイロンからビルマに渡来した。当時セイロンでは受戒の資格を農民階級に限定していたので、農民以下の者はこれを憤り、それらの沙弥のある者はビルマに渡った。Bodawpaya は彼等を引見し、盛大な儀式を催して、これに受戒せしめた。そして彼等をしてセイロンにアマラプラ・ニカーヤを創立せしめた。今日もこの派はセイロンに行われ、シャム・ニカーヤに対抗して、教団内の階級主義に反対している。

1813年、ジャドスン夫妻が来緬して、小規模の宣教をはじめたが、これが米国のバプティスト教会の盛大になるもとをなしている。今日ビルマで最も有力なのはこの教会とカトリック教で、共に教育方面に力をつくしている。ちなみにビルマにおける最初のキリスト教伝導師はパリ国外伝道会のデュヌーとジョレ両名である。彼等がかねてシャムで伝道に従事していたが、当時シャムにいたタライン族の俘虜が彼等の教を受けた縁故から、1689年招かれてスィリアムに来て、ささやかな施療院を開設した。しかしビルマ僧侶の擯斥にあい、1693年丸裸にされて蚊の喰うに委された後、袋に縫い込まれ Ava 附近の河中に投ぜられた。その後1721年までキリスト教伝導師でビルマを訪れたものはなかった。Bodawpaya はその治世38年、75才で歿したが、ビルマ史上最も有力な王であった。

次に仏教史上重要なのは Mindon 王 (1853—78) で、その人格は高邁、イギリス人もこれを友邦の君主と仰いだ位である。彼は自国の領土の一部がイギリスの支配下にあることを遺憾としていた。王はキリスト教会にマンダレー市内の土地や資金を提供したのみならず、一時はその王子を英国教会学校に通わした。王のキリスト教に対する考えは、ビルマで仏教の僧侶が王府に対し強大な勢力を持っているように、キリスト教の宣教師もまたその本国政府に対し、これを動かすだけの力を持っていると考えた。しかし The Life or Legend of Gaudama the Buddha of the Burmese の著者 Bigandet 大僧正がフランス政府の政治的見解を代表することを欲せず、Dr. Marks もビルマのために大砲を購入する斡旋をしてくれず、またイギリス政府に対し割譲地域の返還を勧告してくれないのを見て、王は宣教師を忘恩の徒と断じ、いつしか彼等を疎んずるようになった。

王は僧院の綱規の弛緩が正統派の中にも見られるのを遺憾とし、これを肅正したので、僧院の正統派が再び勝利を得た。王は更に1868年から71年にかけて律蔵を中心として三蔵の本文の異同を校合せしめ、その完全なテキストをマンダレーのクトドー寺の大理石板 729 の表面に刻ましめた。これを第五結集といっているが、この大理石は今日もよく保存されている。

1885年英国は遂にマンダレーを占領し、Alaungpaya 王朝を滅ぼし、ビルマを完全に支配す

ることとなった。これはすべての古い秩序の終息と新しい時代のはじまりで、仏教史の上にも一時期を劃するものである。

さて今日最も有力な仏教の教団は、Tsu Dhamma Gai で、この派に属する比丘は約 65,000 人で、全ビルマに普及している。次に有力なのが Suejin Gai で、主としてマンダレー方面に流布している僧風の厳格なサンガである。この派に属する比丘は約 10,000 人といわれている。次は Duara Gai で、これが一番厳粛なサンガで、約 5,000 人の比丘がいる。この他に Hge Gai という特殊なサンガもある。この派の比丘は約 1,000 人位で、他の派の僧とは全く行動を共にしない。

本家の仏教団体としては仏教青年会とビルマ仏教会がある。仏教青年会は 1906 年に組織され、活潑な進歩的活動をなし、Nationalism の立場から反英運動をやり、宗教団体というより政治的団体の性格を帯びていた。ビルマ仏教会はラングーン郊外 Kaba Aye に本部をおき、第六回仏典結集や Buddha Jayanti の大事業を推進して来た、ビルマ第一の裕福な団体である。この会が全ビルマの仏教界を統轄し、一応対外的にも組織的な活動をしている。

ビルマの僧院は同時に小学校を兼ね初等教育を担当して来た。今日でもポンジー・チャウン（僧院）には少年少女が勉強に来ている。ビルマの子供たちは、ここで基礎教育と共に宗教的・道徳的訓練を受けて育つのである。この点で仏教の僧侶が国民教育に貢献した事実を見逃してはならぬ。独身生活の僧侶は、日本の僧侶に比して一般に無欲で、一応知識階級に属するから、彼等は民衆の尊敬を勝ち得ている。

ビルマの仏教はテーラバーダ仏教を純粹に伝えているといっても、この国に固有な nat 崇拝とある程度融合せざるを得なかった。これは山川草木あらゆるものの中に nat という精霊を認めて、これを崇拝するもので、原始的宗教の形態をした一種の社会的習俗ともみられる。古い寺院の周囲には、これら種々の nat が祀られ、庶民の礼拝の対象となっている。元来 nat には悪霊はなく、一般に人間の祈りをきいてくれるものと考えられているが、時には人間に懲罰を加えるものもある。ビルマの航空機がマンダレー南方の Popa Hill にぶつかって惨事を惹起した時、ビルマ人は Popa Hill 一帯の nat 上空を飛んだから、その罰を受けたのだと言った。nat には自然現象と思われるものの外に、亡霊と看似されるものや、インド教の神々に由来すると思われるものもある。仏教のもつ寛容性は、これらの異端的信仰を排斥せず、すべてこれを自己の中にとり入れてしまっている。その純粹性を誇るテーラバーダ仏教も、このような土着の信仰を肅正することができないでいるが、これはビルマにおける一般教育の低さが原因しているとも考えられる。

ビルマは何と云っても、最も有力なテーラバーダ仏教国の一つである。その憲法第 21 条に「仏教は国民の大多数の信仰する宗教としてその特殊の地位を承認」され、ビルマ人の宗教として、また倫理道徳のバックボーンとして国民生活の中に強く生きている。もちろん辺境に住

む未開民族の中には各種の信仰もあり、ビルマには仏教以外の宗教、たとえばインド教やキリスト教も盛んである。独立後日なお浅いビルマとしては、これらの辺境少数民族の統合の上からも、仏教を以って国教として仏教だけで押し切るわけにはいかない。しかし国民の大部分が熱心な仏教徒であるという事実を無視することはできない。

剃髪して黄衣をつけたボンジー（僧侶）の姿はビルマのいたるところに見られ、農業国ビルマの稲穂とパゴダとボンジーの黄金色こそはビルマを Golden Earth と呼ばしめて来た。ビルマはその職業人口の七割までが農業に従事している国である。米の外国輸出がうまくゆくかどうかによって、国内経済のバランスがかわるのである。ウ・ヌ前首相は熱心な仏教徒であり、彼は仏教を国教にすることの可否を真剣に考慮していた。しかし、少数民族統合の上から、これらの少数民族に多数民族の信仰をおしつけることをためらっていたようである。さらに忘れてならぬことは、ビルマが政治的に社会主義国家であることである。ビルマは独立以来、社会主義政策をとり、国内的には土地の国有、協同組合の育成、教育の国家負担、社会保証の実施等に社会主義の国内的理想を実現せんとして、既に相当の成績をあげている。しかも、その社会主義は Nationalism と表裏をなしていることに注目しなければならぬ。また、対外的にはインドと同様に絶対中立主義をとり、反戦、反帝国主義、反植民地主義、反全体主義の線で動いて来ている。それらの内外の政策の背後にも仏教的理想が含まれていると見られるであろう。

ビルマの仏教はセイロンのそれに比して保守的であるように思われる。テーラバーダ仏教そのものはシャカの仏教を純粹に保持しようとしている点で、純粹であり高貴である。これに比し大乘仏教は、仏教の純粹性を失って儀式主義に墮した極めて卑俗なものであると、南方仏教諸国の人々のみならず、欧米の学者もしばしば言うことがある。しかし、シャカの仏教を純粹に保持しているということ自体が一方から見ると保守的なものということになる。そのように過去のを固執することは南方仏教諸国に共通な性格であるが、特にビルマの仏教徒はセイロンの仏教徒に比してより保守的であるように思われる。Meditation の実践やアビダルマの研究がセイロンに比して、より盛んであることも、一方から見ると、この国の仏教の保守性を物語ることになる。また近年 Nationalism の勃興と共に、国民は国粋主義にはしり、ビルマに固有なものを尊重するようになった。それはビルマ語の普及、ビルマ服の着用となってあらわれているが、近年は一番勝れたビルマの仏教を大乘仏教国へ布教したいというような考にまで発展している。それはビルマから日本へ比丘を派遣したり、日本からの留学僧の招待となってあらわれているが、その結果はたしかに南北仏教交流という一つの新しい現象を生みつつある。

ビルマ政府にはたくさんの省があるが、その中に宗教省があって、諸宗教を管掌している。しかし宗教省は憲法にしたがって特に仏教の育成保護につとめている。その外廓団体ともいべきビルマ仏教会 Burma Buddha Sasana Council はビルマ第一の富裕な団体で、どんな事業でもなしとげうる力を持つといわれる。仏滅2500年の式典に彼等がつくった Kaba Aye の大聖

窟といい、第六回仏典結集の盛儀といい、ビルマ仏教界はビルマのみならずテラバーダ仏教国の一大センターを Kaba Aye につくったといえる。この事実をもってしても、ビルマにおける仏教の比重が如何に大であるかがわかる。しかし、このように大きな比重をもつビルマの仏教が、その近代化の上に如何なる関係にあるかについては、公平に検討されねばならぬ重要な問題である。